

ロバート・ブラウニング：「チャイルド・ ローランド暗黒の塔に来たり」

——その展開とイメージ構成——

神 崎 ゆかり

I

Childe Roland to the dark tower came.

His word was still ‘Fie, foh, and fum.

I smell the blood of a British man.’¹

(III. iv, 182-4)

これはシェイクスピアの「リア王」に出て来るエドガーの台詞である。この台詞の第一行を表題とするロバート・ブラウニング (Robert Browning) の詩 “Childe Roland to the Dark Tower Came”² は、1852年1月2日に「一日に一篇の詩を書くこと」という詩人の年頭の決意に従って一気に書き上げられたといわれている³。三年後出版の *Men and Women* (1855) 第一巻に収められているが、その不気味で醜悪な雰囲気や謎のような性質ゆえに、何故か引き付けられずにはいられない魅力的な詩の一つである。

これまで幾度も試みられたが、誰もまだ成功したことがないという「暗黒の塔」探索の冒険にローランドという騎士が挑戦する。しかし詩の冒頭に到っては、彼もまた長く絶望的な状態の繰り返しであるこの旅に疲れ果て、今では希望もすっかり痩せ細ってしまっている。そしてたとえ失敗して死を迎えることになろうと

も、それで凡てにけりがつくのならばと白髪の際に指示されるまま「灰色の荒野」へと足を進める。あたりは日も暮れ、恐る恐る進む彼の行く手には想像を絶するような不気味な光景が広がり、そこで出くわすものといったら醜く生命を扼ぎとられたようなものばかりである。ようやく目的地に着いたかと思った時には、既に失敗の状態に陥っていたことに気付くのであるが、それでも彼は恐れることなく“Childe Roland to the Dark Tower Came”と角笛を吹き鳴らす。

この詩が一体何を表わしたものであるかという問題については、これまでに多くの批評家が様々な議論を展開してきた。その中でも「この詩を寓意詩と見るべきか否か」という点に議論は集中しているようである。この詩を「愛」の寓意と見る人もいれば、「真理の探究」とか「キリスト教徒の生涯」を示したものであると考える人もいる。しかしブラウニング自身は、ある人に「この詩を寓意詩と見なすことに同意されるか」と尋ねられた時、「その見解を否定はしないが、創作過程に於て寓意的意図は全く意識していなかった」と答えている⁴。彼によれば、この詩は元旦の翌日、“a kind of dream”のように突然頭に浮かんできたものであるという。そして彼は、

...it was simply that I had to do it. I did not know then what I meant beyond that, and I'm sure I don't know now. But I am very fond of it.⁵

と付け加えている。

この詩人の言葉は、寓意詩と見なす批評家たちが分析しているような意味、または既成の教訓を伝達するためにこの詩を書いたのではなく、一種の悪夢のように彼を襲った内的経験を詩人として表出せざるを得なかったということを強調しているようである。要するにこの詩は、詩人が自己の内的経験を表出し、客観的に把握しようとする試みだと言えるのではないだろうか。そうでなければ、三十四のスタンザの大半を占めている荒廃した土地や、その気味の悪い生き物などの描写は単なる装飾物と化してしまうように思われる。なぜならば、そこでは同

じことが繰り返し述べられている だけであって、事態の進展は全く見られないからである。この点に関しては Robert Langbaum も彼の *The Poetry of Experience* (1957) の中で次のように指摘している。つまりローランドの旅の様子は “——defeat, sterility, death”⁶ の繰り返しであると。

“Childe Roland” が以上のような目的で書かれたものであるならば、詩人が自己の内的経験を担い得るものとして、如何なる情況やイメージを構成しているかということが非常に興味深い問題となってくる。この点を検討する前に、まずブラウニングが「イメージ」というものをどのように評価していたかについて少し考えてみたい。

今世紀になって「詩的イメージ」という言葉は、詩や詩の意義を論ずる際にごく一般的に用いられるようになっていたが、イメージを意識し、かつ評価する態度は詩人や批評家、あるいは時代によっても様々である。C. Day Lewis は彼の *The Poetic Image* (1947) の中で「詩的イメージ」というものを、「外界の实在の正確な反映以上の何ものかを我々の想像力にもたらすような言葉で作られた絵」⁷ と定義しているが、このイメージを詩の核心と見なすことは、それを単なる装飾物と考えていた十八世紀以前の詩人や批評家によっては非難されるかもしれない。しかしブラウニングは、既にイメージをかなり重視していた詩人であると言える。このことは、「超絶主義」と題する十二巻もの長詩を書いた架空の若い詩人に対する忠告であるという短詩、“Transcendentalism” の一節に窺える。

Song's our art :

Whereas you please to speak these naked thoughts

Instead of draping them in sights and sounds.

(2-4)

ここでブラウニングは、詩というものは裸の思想を直接述べるものではなく、それを目に見え、耳に聞くことのできるものとして、言い換えれば具体的なイメージとして表わすものであると言っている。すなわち詩は抽象的推論であっては

ならず、視覚・聴覚・触覚・嗅覚などの感覚作用に訴えるような、言葉によって構成された具体的表現でなければならないということであろう。これは詩人であるブラウニングの自分自身に対する忠告でもあり、彼がこのことを強く意識していたことが理解できる。

このようにイメージというものを重視し、具体的に表現することを常に意識していたブラウニングが、自己の内面把握のためにこの詩を書いたとするならば、我々はそのイメージ構成の分析を通して、詩人の心境を理解し、彼と同様の経験をすることによってそこに潜む真理を見出し得るのではないだろうか。そこでこれから、この詩をその展開とイメージ構成という視点から考察してみたい。

II

“Childe Roland to the Dark Tower Came”は弱強五歩格 (iambic pentameter) の韻律形式をとり、ABBAAB と脚韻を踏む六行のスタンザ三十四でできている。ここで使われているイメージは次々と変化に富むものではあるが、気味の悪い、「死」を暗示するようなもので終始一貫している。しかもそれぞれのイメージは非常に具体的であり、抽象的になりがちなものに対しては特に、ブラウニングが様々な方法を用いてその具体性を増す努力をしていることが窺える。

まず詩の冒頭の

My first thought was, he lied in every word

であるが、この一行では“lied” といという語に注意を集中せずにはいられない。“lied” はそれ自体興味深い言葉であるが、それがこの一行では、五つの強音節の中心に置かれることによって更に印象的なものとなっている。「奴が嘘をついたんだ」と始まるローランドの唐突な独白に対して、「一体誰が何と嘘をついたのか」と問いかけてくるような衝動にかられる。ブラウニング得意の劇的独白の始まりである。嘘をついたのは、

That hoary cripple, with malicious eye
 Askance to watch the working of his lie
 On mine, and mouth scarce to afford
 Suppression of the glee that pursed and scored
 Its edge at one more victim gained thereby.

(I. 2-6)

である。意地悪げな目付きでじろりと睨み、獲物を得た喜びを隠しきれないように口もとを窄めている白髪の跛——何とも気味の悪い相手である。冒頭の“*lied*”から生み出された印象がここで“*working of his lie*”及び最後の行の“*victim*”という語と結びついて、この跛がローランドにとって好ましからぬ相手であるという感じを高めているために、その表情はより一層意地悪さを増して視覚化される。また跛の不気味さはここに見られる視覚的イメージだけでなく、第二スタンザでは、“*skull-like laugh*”という聴覚的イメージを付け加えることで更に強調されている。[1] 音の繰り返しによって一語のように結びついて連続する感じを与える「骸骨のような笑い」とは、「カラカラ」という乾ききったような笑いであろうか。耳を塞いで払い除けようとしても、いつまでも聞こえてくるようで肌寒さを感じないではいられない。また「骸骨」とは「死」と密接に結びついているイメージであり、跛によって引き起こされた雰囲気は次第に「死」に向かって深まっていく。ここでローランドの思い付きとして構成されている跛の強烈なイメージにより、我々は既に何の抵抗もなく彼と同様の経験をしつつあるように思える。すなわち「奴は嘘をついている」というローランドの独白を疑うことなく受け入れざるを得ないということである。

ところがローランドは、「嘘をついている」と思いながらもこの跛の指さす不気味な平原に足を踏み入れる決心をする。その彼の意外な行動の理由が次に明らかにされる。世界中を放浪するという長年の旅にすっかり疲れ果て、幾度も絶望的状況に接してきたために、今では彼の希望は“*Dwindled into a ghost...(IV. 21)*”

となってしまう。希望を失うに到った原因は説明できても、その状態は説明し得るものではない。そこでブラウニングは、希望が消え失せていきつつあるというローランドの抽象的な心の状態を“ghost”という一語によって具象化することを試みている。“ghost”自体は実在し視覚的に経験しうるというものではないが、かなり日常的な言葉であり、我々の中に、「成仏し得ないで生と死の間をさ迷っている不鮮明なもの」という共通の連想があるために、具象化に役立つ語となっているように思われる。“ghost”は希望を失っているがまだ結末に達することもできないというどっちつかずの状態で、遑る瀬なくなっているローランドの感情をイメージ化したものであろう。

成功は言うまでもなく、失敗に到ることもできずにいる今の彼には、とにかく何らかの結末を望むということしか残されていない。それも「死」という失敗の結末を求める気持の方が彼を支配してしまっている。なぜならば、すっかり弱ってしまった彼の心はもはや成功のもたらす喜びには耐えられないと思われるからである。こうして、「嘘をついている」と思いながらも言われるままに前進しようとするローランドを、第一・第二スタンザの跛が暗示していた「死」が支配していくのはごく当然のことのように感じられる。そしてこの失敗こそがむしろ好ましい結末であると考えるに到った彼の複雑で矛盾するような気持は、第五・第六スタンザで「死の床に横たわる病人」のイメージに喩えられる。今にも息を引き取りそうであるがまだ息絶えずにいる「病人」と、彼を取り巻く友人達の姿が映し出される。ところがそこには、「病人」が何とか一命を取り留めてくれるようにと必死で祈り続ける友人の姿は見えず、もうすっかり覚悟を決めてお墓の準備や、それに準ずる旗、旗竿、喪章などのことを相談している友人達と、その話を凡て聞いている「病人」がいる。そして、この友人達を辱しめないために早く死にたいと願っている彼の気持は、今のローランドの心情を具体的にするのに充分すぎるほどではないだろうか。なんとアイロニカルな雰囲気か漂っている。

こうして絶望に似た静けさで、ローランドは眼前に広がる「灰色の荒野」へと足を向ける。彼が覚悟を決めて跛の指さす「灰色の荒野」へ足を踏み入れた途端、

場面はがらりと変わって自然描写が始まる。この荒野の描写は非常に鮮明で視覚に訴えるものである。ここでのブラウニングの自然描写の特異性は、どんな些細なものでも、またどんなに日常的なものであっても見逃すことなく、巧みに詩的表現に変えていくという彼の才能にあるといえよう。例えば、彼が自然界のイメージを選択・構成しようとする時には、植物学者のような興味と鋭い観察力を働かせて記憶を辿り、自然を組み立てていくのである。「灰色の荒野」の描写が始まる。

Such starved ignoble nature ; nothing thrive :
 For flowers—as well expect a cedar grove !
 But cockle, spurge, according to their law
 Might propagate their kind, with none to awe,
 You'd think : a burr had been a treasure-trove.
 (X. 56-60)

まず最初の一行では全体的光景を考え、それに続く四行では視点を次々と変えて荒野の状態をクローズアップする方法をとっている。つまりブラウニングはここで、「何の植物も生えていない」という漠然とした言い方で終わることを避けて、まず“flower”のような短命な植物に始まり、常緑樹の代表として“cedar”を考え、花や木などはないにしても“cockle”や“spurge”のような雑草くらいは蔓延しているだろう……いやしかしそういった雑草も見当たらない。それならば importunity の象徴である“burr”だけはと、繁殖力の強い植物例を挙げて、そのようなものですら見つからないという不毛ぶりを描写しようとしている。“plants”という総括的な言葉だけで片付けるよりもイメージはずっと具体的になるし、詩人と同様の経験を通して我々はその様子を受け取ることができる。また最後の行の“treasure-trove”は一行目の“nothing thrive”と韻を踏んでおり、一行目の意味を補強してこのスタンザをまとめているように感じられる。

“cockle,” “spurge,” “burr” ぐらいいは生い茂っていると思うのであるが、そう

いう雑草さえ見当たらないという「灰色の荒野」は、上の一節に続く第十一・十二スタンザでは更に具体的な描写により、一層際立ってその存在を感じさせられる。「たとえ、ぎざぎざの薊の茎が伸びようとしていてもその頭は切り取られているし、すかんぼのざらざらして黒ずんだ葉は穴や裂け目だらけにされて生命を奪われている。また雑草は癩病患者の髪のように疎らである」といった具合に、植物の詳細な描写を付け加えることでこの荒野の場面はますます鮮明になり、“All hope of greenness (XII. 71)” を妨げられている土地の様子が一段と強調される。ここでイメージ構成に用いられている「茎の折れた薊」や「穴や裂け目だらけの葉」及び「疎らな雑草」などは、それら自体はごく日常的なものであるにもかかわらず非常に不気味な感じを伝えるものとなっている。それは詩の冒頭から続く印象が我々の中にずっと尾を引いているために、“the head was chopped” とか “Pashing their life out” というような句と融合してその存在を重いものに行っていることと、“leprosy” と、それからの響きである “blood” が病的な醜悪さを示す比喩として用いられているためであろう。こうして灰色一色に支配された荒野の様子が鮮明になるにつれ、それに伴う感情が我々の中で新たに喚起されるために、それはローランドが足を踏み入れた荒野の単なる描写に終らず、希望をほとんど失ってしまい絶望の状態にある彼の心の中の greyness を、つまり depression を反映するものであると感ぜられるようになる。「白」と「黒」の中間色である「灰色」は、既に “ghost” のイメージで表わされたローランドの気持と相通じるものであろう。故にこの荒野の “All hope of greenness” の欠如も、ローランドの “Nor hope rekindling (III. 17)” の状態を視覚化したものだと言えるのではないだろうか。

ブラウニングは言葉では説明できないローランドの depressed している抽象的心理を、以上のような様々なイメージで映し出したのであった。新たなイメージは前のイメージの雰囲気感を強調するものとなっているために、イメージが移り進むにつれて、我々の中でもローランドと同様の感情が倍増され、深まっていくのが感ぜられる。そしてそれは、言うまでもなく詩人自身の内面における経験でもある。

以上のことから分かるように、ブラウニングは鋭い洞察力でもって極めて適切なイメージを構成しているといえる。どんなに些細で日常的なものであっても、いったん彼の手にかかる生き生きとして詩的感情を伝えるものとなってくるのである。

“Childe Roland” の「灰色の荒野」の詳細な描写は暗く陰気な気分を伝えるものとなっているが、ブラウニングはそれと同様の構成法でもって全く対照的な、明るく清々しい気分を伝える自然を描くこともできる。その一例として “By the Fire-Side” の一部を挙げてみよう。

That crimson the creeper's leaf across
 Like a splash of blood, intense, abrupt,
 O'er a shield, else gold from rim to boss,
 And lay it for show on the fairy-cupped
 Elf-needed mat of moss,

By the rose-flesh mushrooms, undivulged
 Last evening—nay, in to-day's first dew
 Yon sudden coral nipple bulged
 Where a freaked, fawn-coloured, flasky crew
 Of toad-stools peep indulged.

(XII-XIII. 56-65)

この秋の風景は美しいクローズアップ写真のように鮮明で、山の中の小道の様子が見事に描き出されている。ここでは先程の「灰色の荒野」とは対照的に、植物の生命力のようなものが感じられる。またここに使われている “blood” は、癲病患者の体内を流れているような “blood” ではなくて、赤く脈々と流れる鮮血のイメージであろう。同じ一語が同じ詩人によってこのように対照的に使われていることも興味深い。更に、荒野の灰色一色に対して、ここでは “like splash of

blood”（鮮血が散ったような色），“gold”（黄金色），“rose”（バラ色），“coral”（珊瑚色），“fawn-coloured”（子麗色）など、色も明るく多彩である。この秋の自然も単なる装飾的役割に終わるものではなく、この詩のテーマである二人の恋人の魂が一つに溶け合うという、その生き生きとした瞬間にのみ生命を得るものであると思われる。

ブラウニングの詳細なイメージ構成はもちろん自然界の描写だけに限られているものではない。彼は動物の世界や人間の世界に関するイメージを構成する時にも、同様の洞察力を働かせることが可能である。

III

さて再び“Childe Roland”に帰って、今度は荒野でローランドが次々と出くわすもののイメージ構成を見てみよう。ここからはコントラストによるショックの連続である。

生命という生命が断ち切れ、暗く不気味に広がる荒野のイメージの中に、第十三スタンザに到ると“however he came there——”とあるように、どこから来たとも知れぬ一頭の馬が突然目の前に現われる。それまで地面の雑草の生命まで挽ぎとられている「灰色の荒野」の描写の虜になっている我々は、「馬」という少なくとも生き物が突然出現するわけであるから、ぎょっとするような驚きを感じないではいられない。しかしこの衝撃はほんの一瞬の経験に終わり、イメージはすぐにまた元の不気味で鈍いものに戻る。「馬」は「生命」へのイメージ転換の働きを助けるものではなかった。「骨という骨は突き出てぼうっと立っており、生きているのか死んでいるのかも分からない。赤く痩せて瘤のできた首を伸ばし、目は錆び色のたてがみの下で閉じたままである。」何と醜い馬の描写であろうか。この「馬」はローランドの見た己の姿であったのかもしれない。このイメージもまた、生きる望みを失った彼の心の状態を具象化したものではないだろうか。

ローランドはこのような暗くて気味の悪い光景を払い除けようと、目を閉じて

“earlier, happier sights (XV. 187)” (昔の幸福な眺め) を求めるのであるが、その願いも空しく終わり、彼の前にはやはり暗い道しか残されていないことに気付く。心の中に目を向けて昔の楽しかったことを思い出していても、すぐに場面は転回してしまう。その転回は “Alas!” とか “faugh!” のような感嘆詞によって突然やって来る。懐かしい栄光に満ちた友の姿は、すぐに彼らの “disgrace” とか “hangman’s hands” などにとって替わられ、元のイメージと溶け合うのである。感嘆詞の前後でイメージは対照的なものとなっている。そして相変わらず広がる荒野——そこでは、

No sound, no sight as far as eye could strain.

(XVIII. 105)

である。

視覚も聴覚も奪われたように、凡てが暗闇の中に閉じ込められて静止している。ところが今度はそこを突然、「小さな流れ」が行く手を遮る。それによって受ける衝撃は、不意に蛇に足元を横切られた時の驚きに似ている。それまでの dullness とは対照的な、泡立ち渦巻きながら怒り狂ったように流れる川のイメージによって、「静」に対して「動」というコントラストが感じられる。しかしまたすぐに「死」を暗示するイメージが存在を際立たせてくる。「水に垂れて濡れている柳の枝」が “fit of despair” によって擬人化され、「身投げ人の群れ」へとイメージが移っていくあたりは非常におもしろい。

Drenched willows flung them headlong in a fit

Of mute despair, a suicidal throng :

(XX. 117-8)

この最初の一行では強音節は凡て短母音の上にあり、“fit” という語の持つ雰囲気とうまく調和している。それが二行目では長母音と二重母音が交互に強音節として使われており、母音が短母音から長・二重母音に移るにつれて、速度がゆっく

り鈍くなってまた「静」のイメージに戻っていき，“suicidal throng”でもとの「死」のイメージに落着くという過程がごく自然に描かれているように感じられる。そして執念深い流れが去ったかと一瞬ほっとした途端、また再び衝撃のイメージが加えられる。

“a sudden little river”の視覚的イメージに続く第二十一番目のスタンザでは、触覚と聴覚のイメージでぞっとするような気分を高めている。ここでは特にブラウニングの手法の巧みさを感じないではいられない。彼ができる限り多くの感覚作用に訴えようとしていることが窺える。

To set my foot upon a dead man's cheek,
Each step, or feel the spear I thrust to seek
For hollows, tangled in his hair or beard!
—It may have been a water-rat I speared,
But, ugh! it sounded like baby's shriek.
(XXI. 122-6)

死人の頬に足を置いた時の感触とか、その髪や髭が絡み付く感触、及び「ギャー」という赤ん坊の叫びに似た鼠の声などはどれも鳥肌の立つようなイメージで、なんとも言えぬ不気味な雰囲気を与えるものである。このあたりのイメージ構成には Eliot の *The Waste Land* を予測させるものがある。

やっとの思いで向こう岸に辿り着き、ようやくまともな場所にやって來たかと思うが、やはりそれも“Vain presage!”であった。今度は“savage trample”の出現で、ここからは「毒の入った水槽の中のひき蛙」「赤く熱した鉄の籠に放り込まれた山猫」「ガレイ船の奴隸」「拷問用齒車」「地獄の刑具」など「拷問のイメージ」が次々と続く。

第二十六スタンザに入ると再び地面の描写が始まるが、ここでは凡て「悪疾のイメージ」でまとめられている。第十三スタンザの“leprosy”を思わせるような，“blotches rankling,” “boils,” “palsied,” “distorted mouth”などの言葉で

表わされる地面の描写によって、改めて「灰色の荒野」の存在を認識させられる。つまり今までの様々なイメージの変化にもかかわらず事態は何ら進展することなく、相変わらず暗闇が広がっているのである。この荒野での衝撃の連続は一体何を表わすものであったのだろうか。一瞬の安堵はすぐに消え去り、全体のイメージは、「打ちのめされた馬」や「拷問にかけられた動物」「醜く荒れた流れ」「不吉な機械」「病的な大地」といった具合に、破壊的で「死」を暗示するようなものばかりである。そしてそれらは、まるで悪夢に取り付かれた時のように払い除けようとしても後から後から襲ってくる。この次々と回転していくにもかかわらず終始一貫しているイメージやヴィジョンは、いくら逃れようとしても逃れられない depression という negative な力の支配下にあるローランドの内的コンフリクトを視覚化したものではないだろうか。

IV

さて二十七番目のスタンザに到ると、事態は変化の兆しを見せる。まず一羽の鳥が現われるのだが、この“a great black bird”はこれまでの生き物のイメージと異なり、龍のような大きな翼を持っていて滑るような動きでローランドの帽子を掠めて飛んで行くのである。この鳥はもはや破壊されたものでも、拷問にかけられたものでもない。むしろ破壊者である“Apollyon”（ギリシア語で“a destroyer”の意味を持つ）の友である。“guide”という語に暗示されるように、今までの受動的動物のイメージに対してこの鳥は能動的である。この鳥がローランドの帽子を掠めていった途端に、彼の周りの荒野は山々にとって替わられる。そして今まで見えなかった山々が見えた時、彼は気付いたのである。これこそが探し求めていた場所であると。

Burningly it came on me all at once,

This was the place! (XXX. 175-6)

そして彼が、

What in the midst lay but the Tower itself?

(XXXI. 181)

と「暗黒の塔」の存在に気付いた瞬間、イメージは「闇」から「光」へ、「静寂」から「高らかな鐘の音」へと変化する。

荒野が突然山々にとって替わられ、今まで到達するはずもないと諦めていた「暗黒の塔」を目の前にするということは、何を意味しているのであろうか。Sutherland Orr はこの点について次のように指摘している。

The Tower is much nearer and more accessible than Childe Roland has thought ; a sinister-looking man, ... has really put him on the right track ; and as he describes the country through which he passes, it becomes clear that half its horrors are created by his own heated imagination,...⁸

つまりローランドは、我々がこれまでのイメージの中に既に感じていたように、自己の感情を外界の対象に投射していたのである。そのためにごく普通の不毛の山々が、あのように不気味な荒野となって彼の目に映っていたと考えられる。故に、詩の冒頭の“*lied*”とは跛の行為ではなく、ローランド自身の自己に対する行為であったといえる。そしてそのことに気付いた時の、「闇」から「光」へ、「静寂」から「鐘の音」へというイメージの移行は、*vision* の転換によって、対象と自己とが融合していたということを認識するに到ったローランドの「魂の進展」⁹を象徴するものではないだろうか。それ故に、あの光や音は、彼の成功を知らせ称えるというものではなく、以上のことに気付かなかった彼のそれまでの *folly* を照らし出し、鳴り知らせるものとなっている。このことはまた、彼が探し求めていた塔のイメージが決して明るく栄光に満ちたものではないということからも察することができる。「ずんぐりとして、愚か者の心のように暗く、褐色の

石で築かれている円塔」は、詩の冒頭から支配的であった暗く不気味なイメージと再び和解している。にもかかわらず、ローランドがその塔に向かって進んで行くということは、彼がそれまでの depression から逃れ得たということを示すものではなく、むしろそれに対して能動的、積極的になっているということを示していると言えよう。

以上のごとく、ブラウニングは独白者ローランドの心の中に入りこみ、あらゆる対象を彼の目を通して見、その独白に終始することによって depression というものを表出しようとしている。そして彼が構成した変化に富みながらも最後まで一貫している暗いイメージは、その目的を十分に担い得るものであり、それ故に我々はローランドと共に、depressed した気分を経験することを強いられるのである。しかし同時に、この詩の最後の一行、“Childe Roland to the Dark Tower Came” という叫びによって、depression という否定的力を受け止めながら、なお且つ前進しようとしているローランドの積極的な姿勢が我々の中に余韻として残るように思われる。

Notes

テキストは、G. E. Hadow (ed.) *Men and Women* Vol. I. & II. (Oxford: Clarendon Press, 1951) を用い引用はそれに依っている。

1. George I. Duthie & John D. Wilson (ed.) *King Lear* (London: Cambridge University Press, 1960), p. 69.
2. 以下 “Childe Roland” と略す。
3. William Clyde DeVane, *Browning Handbook* (New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1955), p. 229.
4. *Loc. cit.*
5. *Loc. cit.*
6. Robert Langbaum, *The Poetry of Experience* (New York: W. W. Norton & Company, Inc., 1957), pp. 192-3.
7. C. Day Lewis, *The Poetic Image* (London: Cox & Wyman Ltd., 1968), p. 18.
8. Mrs. Sutherland Orr, *A Handbook to the Works of Robert Browning* (New York: Kraus Reprint Co., 1969), pp. 293-4.

9. Horace E. Scudder (ed.) "Preface to Sordello," *The Complete Poetic and Dramatic Works of Robert Browning* (Boston: Houghton, Mifflin and Company, 1895), p. 74.